

本能寺の変の謎

－ 事件の背景と黒幕諸説を考える－

滋賀県立安土城考古博物館
学芸課主幹 高木 叙子

はじめに － いったい何が問題なのか？－

刑事事件としてはまったく問題ない「殺人事件」⇒ すでに解決済み

被害者：織田信長・信忠（死亡）	実行犯：明智光秀（のち死亡）
犯行日時：天正10年(1582) 6月2日未明	
犯行現場：京都市中本能寺（蛸薬師通・油小路通あたり）	

↓

わからないのは「動機」のみ

* 「動機」と「黒幕」探しに躍起になるTV番組・雑誌等… ワイドショー的興味

* 研究者サイドは、変の背景が「歴史的必然」なのか「偶然」なのかを見定めようとする

⇒ 両者と一般興味が渾然となって、今の状況を作っている

(1) 本能寺の変に至る経緯 － 信長の天下統一事業の展開－

尾張国守護代（下四郡）織田氏に仕える三奉行の家に生まれた信長

永禄2年(1559) 岩倉城の織田信安を逐い、尾張をほぼ手中にする。

永禄10年(1567) 稲葉山城の斎藤龍興を落城させる（美濃も領国に組み込む）。

永禄11年(1568) 足利義昭を伴って上洛し、義昭を将軍に据える。

元亀元年(1573) 元亀争乱はじまる（対浅井朝倉氏・本願寺・三好三人衆・武田氏）。

元亀4年(1573) 足利義昭が離京。浅井・朝倉氏が滅亡し元亀争乱終焉。

天正3年(1575) 越前一向一揆殲滅。長篠合戦で勝利。従三位権大納言兼右近衛大将。家督を信忠に譲り尾張・美濃を与える（戦国大名の地位を譲る）。

天正4年(1576) 安土城築城開始。足利義昭が備前鞆に移座。

大坂本願寺：4年4月再挙兵。8年の講和まで籠城戦《佐久間信盛・塙直政》
中国方面：中国は4年5月に毛利氏が敵対宣言《羽柴秀吉》。丹波・丹後《明智光秀》
北陸方面：4年6月に上杉謙信が反信長勢力に加わる《柴田勝家》。
甲信方面：長篠戦勝後も引き続き。10年3月の武田氏滅亡で終焉《織田信忠》
関東方面：10年3月より関東八州御警護。上野方面《滝川一益》。
四国方面：8年までは 明智光秀が取次 。三好氏が降ると信長は 方針変換 。 対長宗我部 。

本能寺の変 … 天正10年(1582) 6月2日未明

毛利攻め支援出陣のため上洛していた信長・信忠を、明智光秀が襲撃

⇒ 信長は本能寺で討たれ、妙覚寺の信忠は誠仁親王を避難させて二条御所で討死

6月13日、中国から引き返してきた秀吉と光秀が山崎で合戦。敗戦後の逃亡中に光秀死去。

(2) 「本能寺の変」評価の変遷

不可解な事件の「動機」づけ

江戸時代：崇拜させられる**家康**・庶民の人気者**秀吉** ⇔ 全く人気のない**信長**（横暴・残虐）

… 儒教思想の影響 **本能寺の変はこんな信長に対する怨恨が原因とされる**



※要するに信長と光秀の「個人的問題」

1958年 高柳光寿『明智光秀』（吉川弘文館）

実証主義史学の手法により、怨恨説・陰謀露見説の根拠を再検討し、否定し去る

（各説の根拠は全て二次資料以下で、歴史論証に耐えられないものだった）



「ではなぜ？」… 他に原因を求める 「背後に何かあったはず」⇒ 黒幕捜しが始まる

but 関連の一次資料は少なく、「**歴史学**」研究は進展せず ⇔ 小説で諸説

噴出する荒唐無稽な黒幕説 = 朝廷・足利義昭・羽柴秀吉・徳川家康・堺商人等



1990年代「本能寺の変」議論が活発化 … 研究者方面にも波及

※画期は2001年の藤田達生著『本能寺の変の群像』（雄山閣）

本能寺の変を、信長の政権構想の矛盾・破綻、すなわち「歴史的必然」ととらえることにより、歴史研究の一大テーマとして分析組上に乗せることを可能たらしめた。
当然ながら、一次資料を駆使した論証・論争が行われるようになる。
光秀の動機も同様に、当時の政治状況の分析（事件の背景）に重点が移るようになる。

※安土城考古博物館平成13年度秋季特別展「是非に及ばずー本能寺の変を考えるー」

(3) 黒幕諸説を考える

①足利義昭黒幕説（藤田達生）

黒幕：鞆（備前国）で毛利氏の庇護を受けている足利義昭が光秀に指示して変をおこさせた

与同者：長宗我部元親・上杉景勝・教如・雑賀衆・筒井順慶・近衛前久・吉田兼見等

根拠：本法寺文書の「信長討果上は」・覚上公御書集所載「河隅忠清書状」・森家文書

検証：義昭の鞆幕府がどこまで力を持っていたのか？

「反信長同盟」が実際どこまで成立・機能していたのか？

各根拠資料の日付・内容を含めた信憑性（相手とどこまで認識共有できているのか）

矛盾点：明確に証明できる決定的資料がまだない

光秀が義昭の指示を得ていたのなら、変後の呼びかけになぜそれを掲げないのか？

②朝廷黒幕説（立花京子＋初期の桐野作人）

黒幕：正親町天皇および誠仁親王を中心とした朝廷が関与

与同者：「反信長神聖同盟」＝近衛前久・吉田兼見・勸修寺晴豊らが光秀を誘って計画

根拠：正親町天皇譲位問題・信長の任官辞官問題（含三職推任）・暦制問題・馬揃の圧力・

信長の自己神格化と天皇との関係・前久や兼見の不可解な行動 etc.

検証：基本的論点は、信長と朝廷との間の緊迫関係の有無。

上記の各証拠を検証しても、両者に基本的な確執は確認できない。むしろ融和・依存。

信長は官位官職への固執はうすい？ 自己神格化は本当にあったのか？

矛盾点：信長が三職推任をじらす理由が無い。本能寺の変実行日を誠仁親王は知らなかった。

③その他黒幕諸説

教如首謀説（小泉義博）・イエズス会関与説（後の立花京子）・秀吉黒幕説 などなど



少しでも可能性のありそうな人物・勢力すべてが挙げられるに至るが、
万人が納得できる、もしくは不確定要素を払拭できる説はいまだ登場していない。

④光秀単独謀反説（桐野作人・堀新・藤本正行・鈴木真哉・小島道裕）

計画・実施は光秀が単独で行った … 信長を殺せる状況が突然浮上したことが引き金

※ 黒幕説はいずれも資料解釈や論証のどこかに無理がある（どちらとも取れる資料も多）

※ クーデター（信長暗殺）は成功したのに、誰も動かない（もしくは受動的）。

⑤四国説 ← 最近の最有力動機？

信長の四国政策の方針転換が、光秀を追い詰めたのか？

長宗我部元親の四国統一を承認 … 交渉窓口は光秀（天正3年以前から）

⇒ 天正8年に阿波三好が臣従したことで、窓口が秀吉に奪われる？

【結局、犯行の動機は？】

- ※ 性格の不一致 ⇒ あり得るかも △
ただし、「信長＝横暴・酷薄」「光秀＝神経質・常識人」は要検討
- ※ 天皇をないがしろにしたことに危機感 ⇒ 朝廷と信長の関係の現状認識ではムリ ×
- ※ 光秀野望説 ⇒ 当時の年齢や言動を考えれば可能性薄い ×
- ※ 信長の暴力や非道な仕打ちに対する怨恨 ⇒ 根拠資料の信憑性ゼロ ×
- ※ 信長の四国対策転換に伴う苦悩・不安 ⇒ 実際に光秀ぬきで四国方面軍渡海直前 ○
- ※ 領地没収と出雲・石見国替 ⇒ 根拠の信憑性がなく実際に没収もされていない △

おわりに – 近年の傾向 –

研究者（と一部の真摯な人々）

良質の一次資料を駆使して「わかりうる」
真実を追究する姿勢が定着しつつある
⇒ 変わりゆく戦国時代像・信長像



小説・ドラマ・マスコミ・一部出版社

売上増や視聴率増加を目的とした一方的・
扇動的情報提示がエスカレート
⇒ 刹那的で無責任なイメージが拡散

これらの被害を最も受けていると思われるのが、「織田信長」「本能寺の変」

⇒ 視聴者・読者は、それらの情報をきちんと見極める必要がある

《参考文献》 ※一般に手に入りやすい単行本に絞っています

藤田達生『本能寺の変の群像－中世と近世の相剋－』（雄山閣 2001年）

谷口克広『検証本能寺の変』（2007年 吉川弘文館）

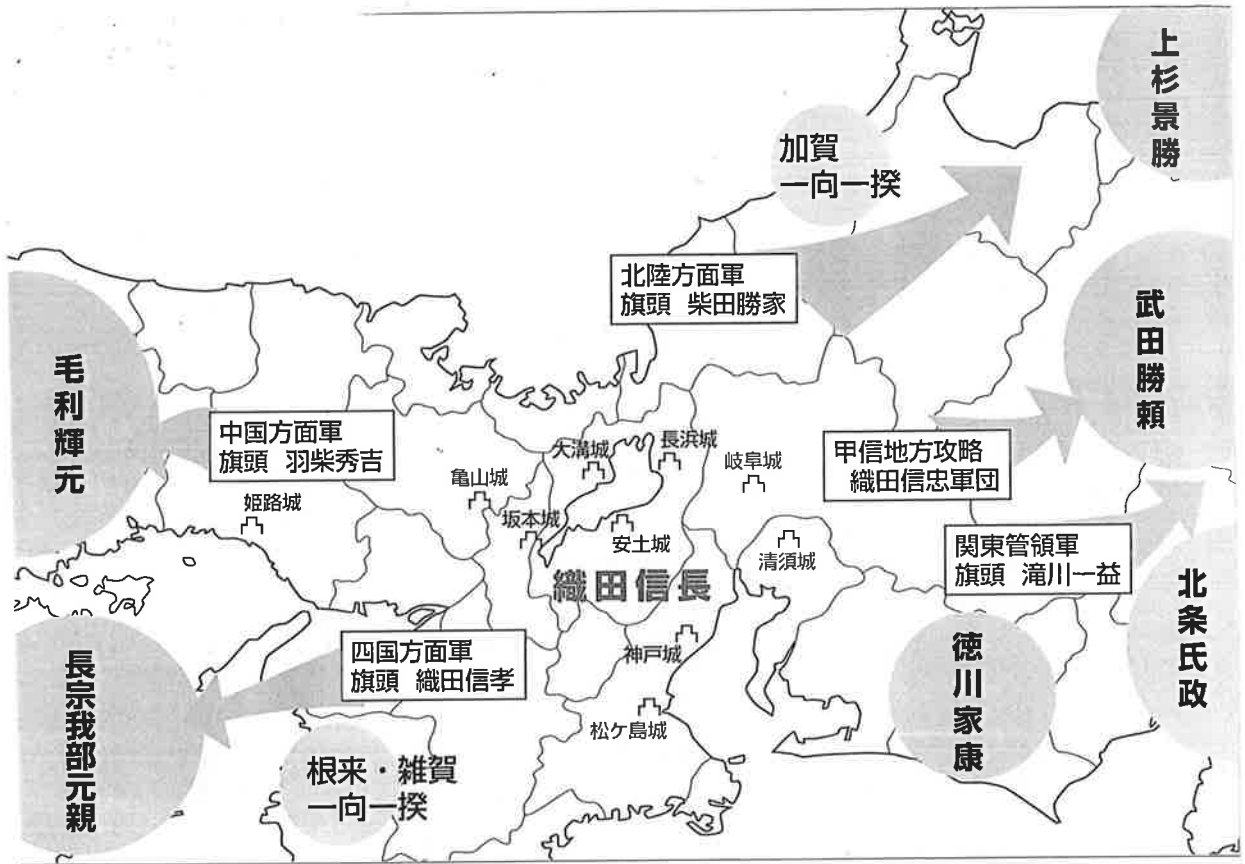
金子拓『織田信長（天下人）の実像』（講談社現代新書 2014年）

藤田達生編『織田政権と本能寺の変』（塙書房 2021年）

滋賀県立安土城考古博物館『室町最後の将軍－足利義昭と織田信長－』（平成22年）

信長・光秀関係年表

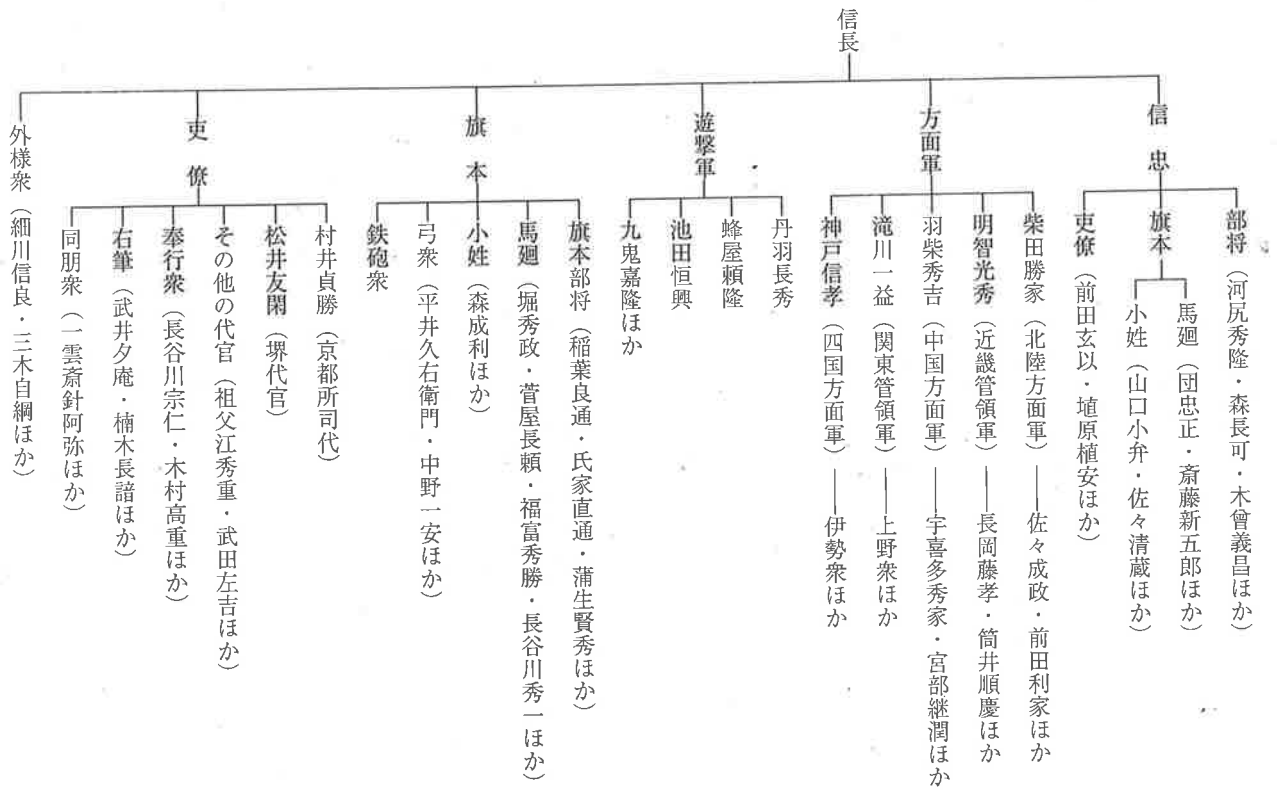
元号	年	西暦	織田信長	明智光秀
永正	13	1516		光秀誕生か？(67歳没年説)
享祿	元	1528		光秀誕生か？(55歳没年説)
天文	3	1534	尾張勝幡城主織田信秀の嫡男として誕生。	
	15	1546	元服。翌年「武者始」として初陣。	
	21	1552	3月3日 父信秀が病没。織田家の家督を継ぐ。	
弘治	元	1555	4月20日 清須城を奪って居城とする。	
永祿	2	1559	尾張国をほぼ手中に収める。	
	3	1560	5月19日 尾張国桶狭間で、今川義元を討つ。	
	8	1565	暗殺された將軍義輝の弟から上洛供奉要請を受ける。	9年以前、高島郡田中城に籠城していたという。
	10	1567	美濃攻略。岐阜を居城とする。天下布武印使用開始。	越前の足利義昭に足輕衆として仕えるか？
	11	1568	9月 足利義昭を伴って上洛。以後、幕政に加わる。	義昭と信長の仲介をするという。信長と義昭に両属。
	12	1569	2月 北伊勢攻略。	正月 三好三人衆が義昭を襲撃。光秀らが防戦。
元龜	元	1570	5月 越前朝倉氏討伐に出発。浅井長政が離反。 6月28日 姉川の戦い。 9月 本願寺顕如が反信長の檄文を發する。	信長、近江南郡に部将を配置する(宇佐山に森)。 姉川合戦に参加。大坂にも出陣。將軍城を任される。 9月 森可成が討死。光秀が宇佐山城主となる。
	2		9月 延暦寺焼き討ち。	延暦寺焼討に従軍。志賀郡を与えられる。 この年、比叡山領の処理を巡って足利義昭と対立か。
	4	1573	2月 足利義昭が信長に対して挙兵。4月に降伏。 7月 義昭が再度挙兵、敗北して京都を逐われる。 8月 朝倉氏を滅ぼす。次いで浅井氏を滅ぼす。	義昭を離れ信長直属の家臣となる。 天下所司代となった村井貞勝の補佐を務める。
天正	元			
	2	1574	1月 越前一向一揆勃発。 9月 伊勢長島の一向一揆を殲滅する。	娘を細川忠興・織田信澄に嫁する約束をする。 摂津・河内方面で三好軍や一揆と戦う。
	3	1575	5月 長篠の戦い。武田勝頼軍を大破する。 7月 天皇より勧められた官位官職を辞退する。 8月 越前一向一揆征伐。10月、大坂本願寺と講和。 11月7日 従三位権大納言兼右近衛大将に叙任。 11月28日 家督を嫡男信忠に譲る。	6月、信長に丹波攻略を命じられる。 信長の奏請で日向守に任官し、惟任姓を授かる。 越前一向一揆討伐に従軍し、加賀まで進軍。 丹波攻め本格化。丹波黒井城を包圍。 この頃、土佐の長宗我部元親との仲介役を担う。
	4	1576	近江国安土に移り、築城を開始する。 4月 大坂本願寺との講和が破れ、戦闘再開へ。 5月 毛利輝元が信長に敵対を表明。	八上城の波多野氏が背き、光秀の丹波攻めは頓挫。 大坂本願寺攻めに出陣。陣中で発病し、治療。
	5	1577	羽柴秀吉に播磨平定を命じる。 8月 柴田勝家を加賀に派遣し上杉謙信に備える。	2月 紀伊雑賀攻めに従軍。 10月 信長に背いた松永久秀の討伐に参戦。
	6	1578	10月 荒木村重が本願寺と通じ、信長に背いて挙兵。	3月 再び丹波出陣を命じられる。 本願寺攻撃、荒木征伐、播磨・丹波攻めなどに奔走。
	7	1579	安土城天主が完成し、信長が天主に移る。 5月 城下浄徳院で安土宗論を行なう。	6月 丹波八上城を落とす。波多野氏を滅ぼす。 10月 丹波・丹後を平定し終え、信長に報告。
	8	1580	大坂本願寺を降し、講和を結ぶ。	「近畿管領」的役割を担うようになる。
	9	1581	正月に安土で、2月に京都で盛大に馬揃を挙行。 9月 伊賀国を平定する。	2月の馬揃に大和衆と上山城衆を率いて行進する。 丹波・丹後経営で新領地の経営に取り組む。
	10	1582	3月 甲斐の武田氏討伐を成し遂げる。 5月 織田信孝を四国方面軍司令官に任じ、出撃を命じる。 6月2日 本能寺の変勃発、信長討死。	武田攻めに加わるも参戦はなく、信長と富士山遊覧。 安土を訪れた徳川家康の饗応役に任じられる。 京都本能寺で主君信長と嫡男信忠を討つ。 6月5日に安土入城。7日に朝廷の勅使と面会。 13日 山崎合戦で敗退。逃走中に落命する。



天正10年頃の織田一族および家臣団城郭配置と各方面軍

本能寺の変直前の家臣団組織

(谷口克広著「信長の親衛隊」より)



(四) 去程に不慮の題目出来して、

六月朔日夜に入り、丹波国亀山にて維任日向守光秀逆心を企て、明智左馬助・明智次右衛門・藤田伝五・斎藤内藏佐、是等として談合を相究め、信長を討果し、天下の主となるべき調儀を究め、亀山より中国へは三草越えを仕候。爰を引返し、東向きに馬の首を並べ、

老の山へ上り、山崎より撰津国地を出勢すべきの旨、諸卒に申触れ、談合の者共に先手を申し付け、

六月朔日夜に入り、老の山へ上り、右へ行く道は山崎天神馬場、撰津国皆道なり。左へ下れば京へ出る道なり。爰を左へ下り、桂川打越し、漸く夜も明方にまかりなり候。

(四) 既に信長公御座所本能寺取巻き、勢衆四方より乱れ入るなり。

信長も御小姓衆も、当座の喧嘩を下々の者共仕出し候と思食され候の処、一向さはなく、ときの声を上げ、御殿へ鉄炮を打入れ候。是は謀叛歟、如何なる者の企ぞと御淀の処に、森乱申す様に、明智が者と見え申候と言上候へば、是非に及ばずと上意候。透をあらせず、御殿へ乗入り、面御堂の御番衆も御殿へ一手になられ候。御厩より矢代勝介・伴太郎左衛門・伴正林・村田吉五、切つて出で討死。此外、御中間衆、藤九郎・藤八・岩・新六・彦一・弥六・熊・小駒若・虎若・息小虎若初めとして廿四人、御厩にて討死。

御殿の内にて討死の衆、

森乱・森力・森坊兄弟三人、小河愛平・高橋虎松・金森義入・菅

屋角藏・魚住勝七・武田喜太郎・大塚又一郎・狩野又九郎・薄田与五郎・今川孫二郎・落合小八郎・伊藤彦作・久々利龜・種田龜・山田弥太郎・飯河宮松・祖父江孫・柏原鍋兄弟・針阿弥・平尾久助・大塚孫三・湯浅甚介・小倉松寿、

御小姓衆懸り合ひ、討死候なり。湯浅甚介・小倉松寿、此兩人は町の宿にて此由を承り、敵の中に交入り、本能寺へ懸込討死。御台所の口にては、高橋虎松暫し支へ合ひ、比類なき働きなり。

信長初めには御弓を取合ひ、二・三つ遊ばし候へば、何れも時刻到来候て、御弓の絃切れ、其後御鎧にて御戦ひなされ、御肘に鎧疵を被られ引退き、是迄御そばに女共付きそひて居り申候を、女はくろしからず、急ぎ罷出でよと仰せられ、追出させられ、既に御殿に火を懸け焼来り候。御姿を御見せ有間敷と思食され候歟、殿中奥深く入り給ひ、内よりも御南戸の口を引立て無情御腹めされ、

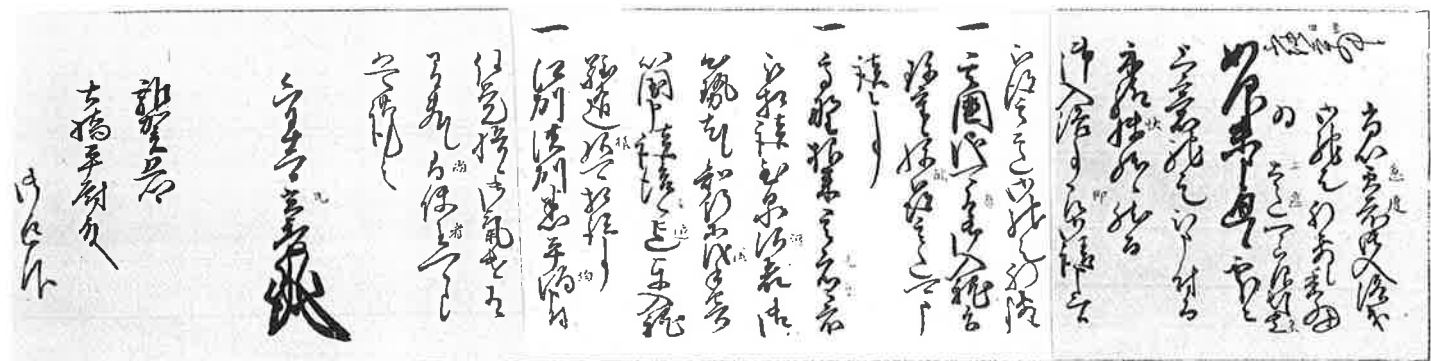
本城惣右衛門覚書（部分）

一、あけちむほんいたし、
 のふなかさま二はらめさせ候時、ほんのふ寺へ
 我等よりさきへはいり申なとと
 いふ人候ハ、それハミなうそにて
 候ハんと存候。其ゆへハ、のふなかさま二
 其折ふし、たいこさまひつちう二
 てるもと殿御とり相にて御入候。それゆへ、
 け二、あけちこし申候由申候。山さきの
 かたへとこころさし候へハ、おもひの
 ほか京へと申候。我等ハ其折ふし
 いへやすさま御じやうらくにて
 候ま、いゑやすさまとはかり存候。
 ほんのふ寺といふところもしり
 不申候。人じうの中より、馬のり二人
 いて申候。たれそと存候へハ、さいたう
 くら介殿しそく、こしやう共二人
 ほんのちのかたへのり被申候あいた、
 我等其あと二つき、かたはらまちへ
 入申候。それ二人ハきたのかたへこし申候。
 我等ハミなみほりきわへ、ひかしむき二
 参候。ほん道へ出申候、其はしのきわ二、
 人一人い申候を、其まゝ我等くびとり申候。
 それより内へ入候へハ、もんハひらいて
 ねすミほとなる物なく候つる。其くひ
 もち候て内へ入り申候。さためて弥平次殿
 ほろの衆二人、きたのかたよりは
 入、くひハうちすと申候まゝ、とう
 の下へなげ入、をもてへはいり候へハ、
 ひろま二も一人も人なく候。かやはかり
 つり候て、人なく候つる。くりのかたより
 さげかミいたししろききる物

き候て、我等女一人とらへ申候へハ、さむらいハ
 一人もなく候。うへさましろききる物
 めし候はん由申候へ共、のふなかさまとハ
 不存候。其女、さいとう蔵介殿へ
 わたし申候。ねすミもい不申候つる。
 御ほうかうの衆ハはかま・かたきぬ
 にも、たちととり二三人たうのうちへ
 入申候。そこにてくひ又一ツとり申候。
 其物ハ一人おくのまより出、おひもいたし
 不申、刀ぬき、あさきかたひらにて出
 申候、其折ふしハ、もはや人がす入申候。
 それヲミ、くすれ申候。我等ハかやつり申候かけへ
 はいり候へハ、かの物いて、すき候まゝうしろより
 きり申候。其時共二くひ以上二ツとり申候。
 ほうひとしてやりくれ被申候。
 の、口さい太郎坊二い申候。

尚以、受衆御入洛義御馳走肝要候、委細為 上意、可被仰
 出候由也、不能巨細候、
 如仰未申通候処二、上意馳走被申付而示給、快然候、然而
 御入洛事、即御請申上候、被得其意、御馳走肝要候事、
 一、其国儀、可有御入魂旨、珍重候、弥被得其意、可申談候事、
 一、高野・根来・其元之衆被相談、至泉・河表御出勢尤候、
 知行等儀、年寄以国申談、 後々迄互入魂難遁様、可相談事、
 一、江州・淡州悉平均申付、任覚悟候、御氣遣有間敷候、尚使
 者可申候、恐々謹言、
 (天正十年)
 六月十二日
 光秀（花押）

雑賀五郷
 土橋平尉殿
 御返報



〈参考〉明智光秀書状
 (「森文書」東京大学史料編纂所影写本)

義昭の足跡 ②

※神保忠宏氏作成

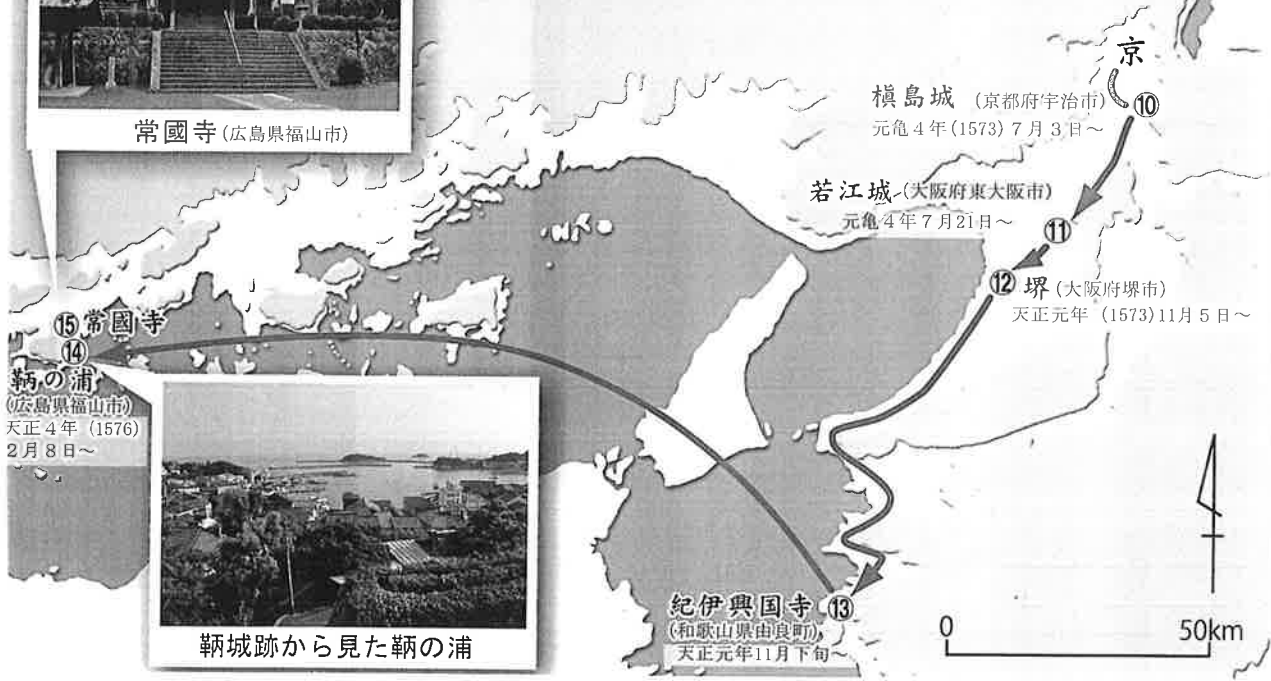


常國寺 (広島県福山市)

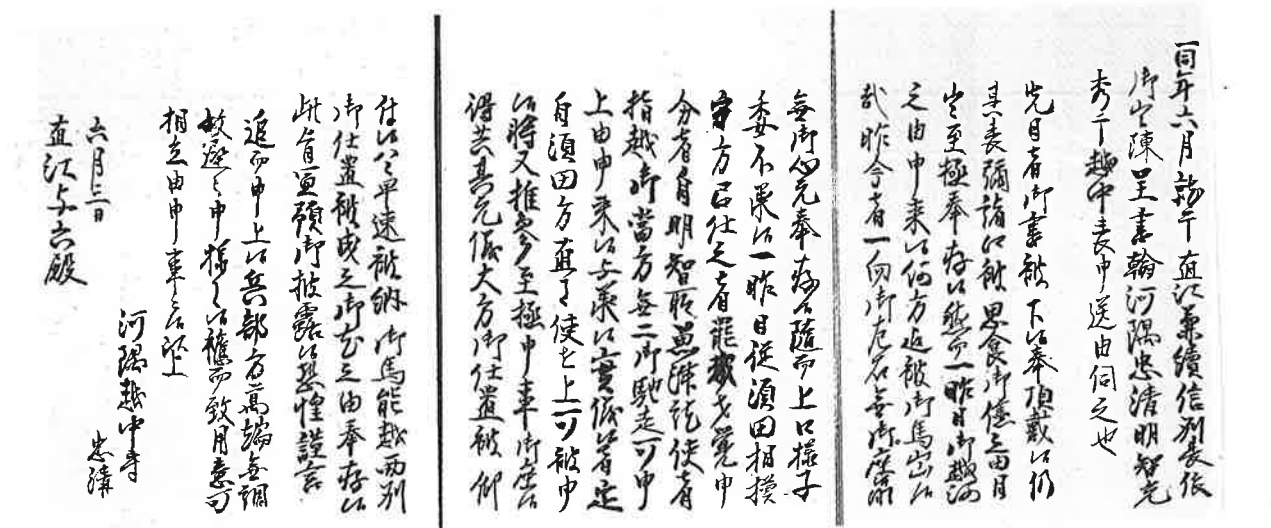
⑮ 常國寺
⑭ 鞆の浦
(広島県福山市)
天正4年(1576)
2月8日~



鞆城跡から見た鞆の浦



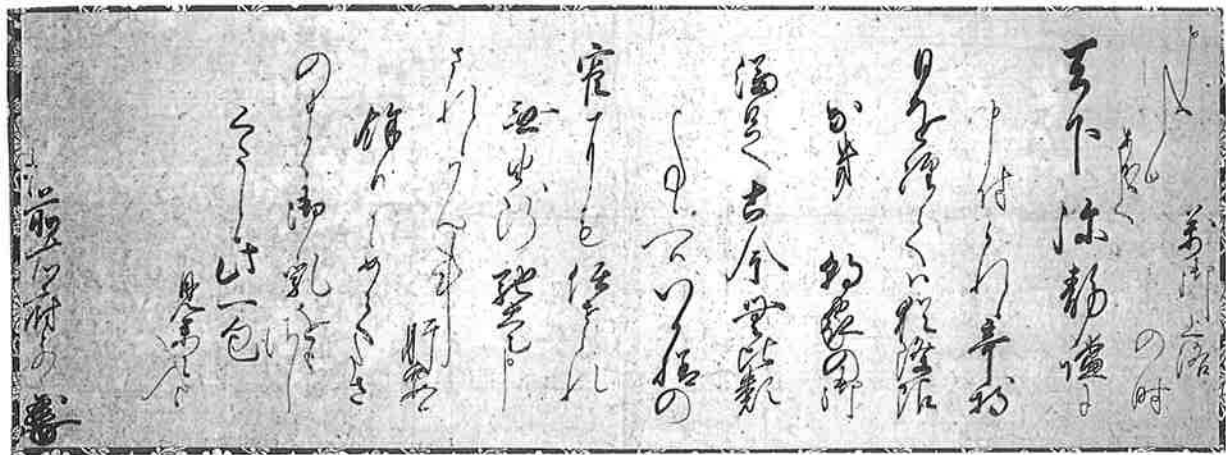
49 足利義昭御内書 (京都市 本法寺蔵)



48 覚上公御書集 (東京大学文学部蔵)

信長と朝廷関係年表

年	西暦	月	日	朝廷と信長
天文二二	一五四三			信長の父・信秀、禁裏修理費四千貫を献上する。
永禄一〇	一五六七	一一		信長、美濃平定に際して天皇の綸旨を受け、禁裏御料所回復・禁裏修理・誠仁親王元服料の奉仕を命じられる。
永禄一一	一五六八	九		信長、禁裏御料所・山国庄の回復に尽力する。その他の御料所についても、その後回復に努める。
永禄一二	一五六九	四		信長、禁裏修復に着手（元亀二年まで）。
元亀元	一五七〇	四	二五	朝廷は信長の越前朝倉攻めに対して戦勝祈願を行う。
元亀二	一五七二	九		正親町天皇の勅命により、信長、朝倉氏・浅井氏と和す。
天正元	一五七二	一一		信長、禁裏および幕府経済回復のため洛中洛外に段別一升の米を課し、この米の貸付利息を公用に充てさせる。
天正二	一五七四	三	二七	正親町天皇讓位問題。信長、勅書を賜う。
天正三	一五七五	八	一四	信長、正倉院の名香・蘭奢待を切り取る。
天正四	一五七六	五		越前一向一揆の陣中見舞いに勸修寺晴豊を勅使に派遣。
天正五	一五七七	一一		信長、従三位権大納言兼右近衛大将に叙任。公家來や京中社寺に広く新地を宛行う。
天正六	一五七八	一	一六	信長の対大坂本願寺戦に対し、朝廷の戦勝祈願。また陣中見舞いに勸修寺晴豊と甘露寺経元を勅使として派遣。
天正七	一五七九	九	二六	信長、正三位に叙せられ、その後内大臣に任ぜられる。
天正八	一五八〇	八		対根来雑賀攻めに対して天皇の戦勝祈願が行われる。
天正九	一五八一	三		信長、従二位に叙せられ、その後右大臣に任ぜられる。
天正一〇	一五八二	二		信長、正二位に叙せられる。
		六	二	信長、突然に右大臣および右近衛大将を辞任する。
		五		荒木村重討伐の陣中見舞いに勅使派遣。
		三		大坂本願寺との講和に勅命を請う。
		六		信長の左大臣推任問題が生ずる。
		六		暦制問題。信長、この年の閏月の有無につき、濃尾の暦を引き合 いに出して争論となる。
				信長の甲州攻めに戦勝祈願の祈禱を行い、陣中見舞の勅使派遣。 信長の三職推任問題が生ずる。勅使が安土城に遣わされる。
				誠仁親王、安土城の明智光秀に勅使を遣わす。



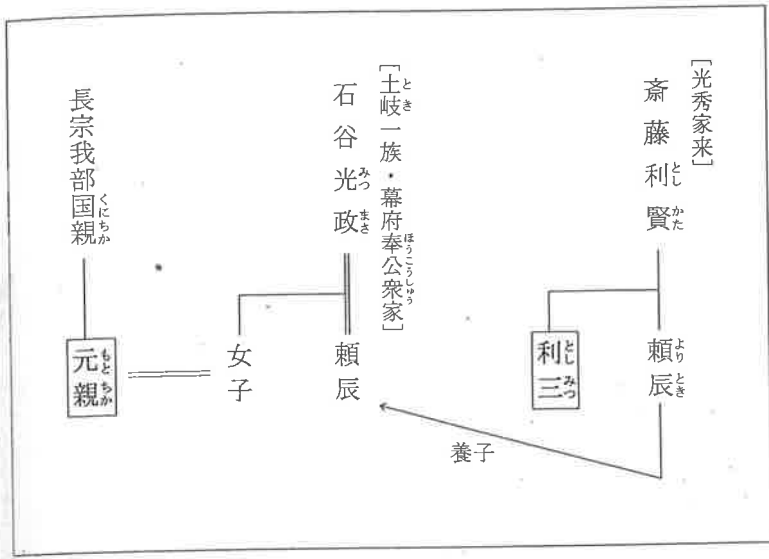
〔参考〕○誠仁親王御消息（畠山記念館蔵）

萬御上洛の時
申候へく候、
めでたかしく
天下弥静諡に
申付られ候、奇特
日を経てハ猶際限
なき 朝家の御
満足、古今無比類
事候へハ、いか程の
官にも任せられ、
無由断馳走申
され候ハん事肝要候、
餘りにめてたさ
のまま、御乳をまさし
ぐたし候、此一包
見参に入候、
〔墨引〕前右府との〔花押〕

本能寺の夜一再考

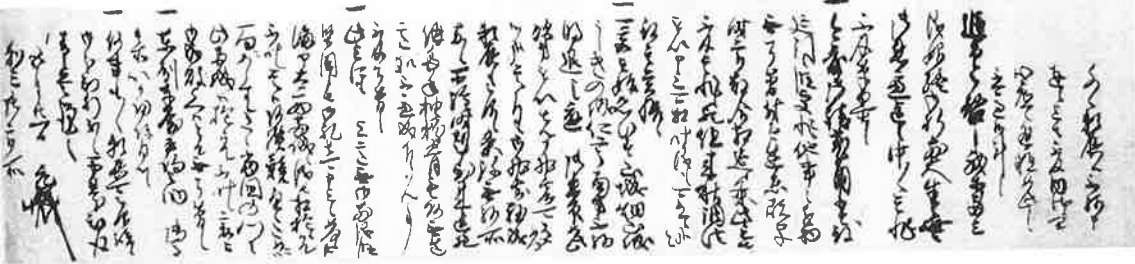
何か明智光秀をほ起すまでか

斎藤・石谷・長宗我部氏関係図



<58>

四国征討決定直後の長宗我部元親の心境



天正十年（一五八二）二月、信長は三好康長に四国出陣を命じた。五月七日に信長は、三男の神戸（織田）信孝を四国攻撃軍の最高指揮官とし、戦後、讃岐（香川県）を信孝に、阿波（徳島県）を康長に与え、信長が淡路（徳島県）まで出陣した際、土佐・伊予については決めると指示した。また、信孝は康長の養子となり、八月までの三か月の出兵を予定していた。康長は、羽柴秀吉の甥の秀次も養子としていた。このことは、明智光秀を四国政策の担当から外し、新たに神戸（織田）信孝―三好康長―羽柴秀吉の系列に任せることを意味した。光秀を通じた融和政策から、四国を征服していく方向へと転換したのである。この文書は、四国征討決定直後の長宗我部元親の心境を示すもので、早くも阿波から軍勢を撤退し、信長の意向に従う姿勢を示している。元親は光秀を通じ、いまだ融和的な解決を模索していた。

（意訳）長宗我部元親から斎藤利三宛て 当方への心遣いは、書面では尽くし難い。一、今度の（信長の要請に対する）承諾が遅延したのは他意なく、進物が用意できなかったことにより、来秋には用意の予定で。一、（阿波（徳島県）の山城である）一宮をはじめ、夷山城、畑山城、牛岐城、仁宇南方を残らず明け渡し退きます。（信長の）朱印状に対し、このように対応したことを（あなたから）披露してほしい。石谷頼辰が言うには、これでも披露は難しく、結局は戦いとなるのでしようか。また長年、信長のために粉骨し、悪事を企むこともなかったのに、突然のこの様な仕打ちに思ってもみないことです。一、その上で、どうしても海部・大西の両城は持つていたい。これは阿波（徳島県）・讃岐（香川県）を争い望むためではなく、ただ土佐の門に位置する城として持つ必要があるためです。一、東国を平定され帰陣されたことを祝います。一、何事も石谷頼辰が述べるので相談してほしい。

長宗我部元親書状（斎藤利三宛）
（天正十年（一五八二）五月二十一日付）
石谷家文書 岡山・林原美術館蔵